

酔眼流旅日記 〈34〉

武田泰淳さんとビール

村松 友視

題字も

イラスト／灘本唯人

私は、中央公論社という出版社に、十八年八ヶ月つとめていた。「小説中央公論」「婦人公論」編集部を経て、新しく創刊された文芸誌『海』に在籍したのがもともと長く、そこで何人かの作家を担当した。その中で、「酒」とからんで思い出される人々が多いが、「原稿」と「酒」という二つの関係において心に残っているのが、武田泰淳さんだった。

文芸誌『海』に配属されて、まず担当させられた作家の一人が武田泰淳さんだった。させられた……というのは、もちろんいやいや担当したという意味ではなく、すでに第一次戦後派として悠々たる名声を馳せていた武田泰淳さんの担当を、編集長が私を圧迫するために押しつけたという感じがあったのを表わしたかったための言い方だ。

もとより、私は武田泰淳さんの文名の高さに何ら異存はなく、読者としては尊敬していた。だが、一九七〇年を前にして発刊される文芸誌たる『海』の連載小説は、もっと若い作家がふさわしいと思

っていた。そんな気分の私にとって、武田泰淳担当というのはやや押しつけたなイメージがあったのだ。

ところが、いざお目にかかってみるとこの武田泰淳さん、遠望していた強面のいかめしい作家とはちがって、悠々たる自由人だった。もちろん、知識は底知れず思想の尖つ先は鋭かったが、私のごとき若輩の編集者を圧迫するような狭い器量ではなく、低いレベルに降りて対等の会話をしてくれた。

「富士」というタイトルの連載小説を書くにあたって、編集長は山荘日記みたいなものを考えていたようで、富士の自然や富士の歴史、あるいは富士にまつわる伝説や富士につながる街道などの資料を、せつせと武田泰淳さんのもとに送っていた。

私は、担当になったとたん、「盲人にとつての富士山とはいかなるものでありましょう」などと青臭くもしゃらくさい発言を向け、武田泰淳さんをまどわせた。とまどわせた……つもりだったが、武田泰淳さんはそれを真に受けるという拳に出た。そして、「富士」



というタイトルの連載小説は、山荘日記から大きく外れた作品となり、戦争中の精神病院を舞台として、正気と狂気の問題が展開する、戦略にみちた作品となった。『富士山』は、一般的な意味での美の象徴となり、その麓にある精神病院に、戦争という狂気の時代に狂気として押し込まれた人々が描かれた。狂気の時代における狂気は、狂気でない世界における正気ということであり、そのテーマをあやつる武田泰淳さんの作品は、知的スリルにみちていた。

連載が始まると、もはや私は編集長から押しつけられたとか、すでに権威ある作家であるとかいう矢印で武田泰淳さんを見ることをしなかった。その偉大な作品の担当者としての誇りをもって、締切のたびに武田泰淳邸をおとずれるようになったのだった。

武田泰淳さんが、しばらく待っている私の前に、おごそかな表情で、二階からの階段を降りてくる。すると、泰淳夫人の武田百合子さんが、冷蔵庫から缶ビールを取り出してご主人に手渡し、私の前にも一個置いてくれる。プシュッという音とともに缶ビールが開き、武田泰淳さんは私の挨拶をやや無表情で受けるのだが、ふた口くらいビールを飲んだところで急に無邪気な表情になる。そのあとは、私とまったく平行な会話に終始してくれるのだが、階段から降りて来るときは、いつもいかめしく、おごそかな表情なのだ。まず玄関があり、次に応接間となって居間となる……という手順があるというあんばいだ。

この頃、武田泰淳さんにはアルコール依存症的な手のふるえが見られたが、人見知りやシャイな感覚が、ビールによって溶かされてゆく気配と言った方が、当てているような気がした。酒が人を演出するのか、人が酒を演出するのかの話も、あのときの武田泰淳さんにはからんでいた。

KOBECCO '99

富永

弘子

HIROKO TOMINAGA (ヴァイオリニスト)

華麗に可憐に音を紡ぐ



ピアジュリアンにて 撮影/米田英男

「日本で唯一、固定メンバーによるバロック楽器の演奏を聴かせてくれるオーケストラ」など、なにかと話題の多い「日本テレマン協会」に所属。この五月には神戸松方ホールで定期演奏会が開かれ、ソリストとしてのデビューを果たした。

西宮で生まれ、幼い頃からヴァイオリンがそばにあり、食事をして練習をして学校に行くということが自然なことであった。

華奢で楚楚とした可憐な雰囲気漂わせている。しかし、演奏は実に華麗に悠々と、ホール内の観客を魅了するスケールの大きさを放つ。そんな音の幅を作り上げたのは彼女が演奏するバロック楽器とモダン楽器。同じヴァイオリンでも構造から弾き方までまったく異なったものらしい。モダンになじんでいた彼女は、テレマンでバロックに触ったが思ったように音が出ず、同じヴァイオリンなのにどうしてだろう、と試行錯誤の日々が長く続いた。

ある日、楽器が違うのにそれに向う自分は何も変わっていないことに気づいた。それからバロックの音も出るようになり、どちらの楽器を弾くことも楽しくなった。別の楽器という特別な意識もなく、ヴァイオリンに違いはないとまで思えるようになった。「これまでは、自分が楽器を弾いているという気持が強かった。でも楽器と曲があり、私の仕事は音を出すことだと思えるようになったんです」。彼女の心の変化は音に現れている。弾くことの楽しさ、喜びが聞く者にも伝わってくる音だ。

〈前田〉

KOBECCO '99

マーティ・メリリヤン 一色

MARTY MELLAN ISHIKI 〈ミュージカル俳優〉

夢を与えたい



グラン ミカエラ イ ダゴにて 撮影/米田定蔵

神戸では三月十一日に新神戸オリエンタルホテルで行なわれた劇団スイセイ・ミュージカル公演「マイドリーム」夢があるから」にアンサンブルダンサーとして出演、全国ツアー二十公演を成功させた。初めて本格的なツアーを経験し、舞台での心得、ツアーを乗り切るための自己管理など、学んだことは大きかったという。

子供の頃は、父親のダゴベルト・メリリヤン・ハラさんの営むチリ料理レストラン「グラン ミカエラ イ ダゴ」で、毎晩のようにダゴさんのラテンのフォルクロレにあわせ踊ったというマーティーさん。「気づいたらリズムをとってる」ほど、音楽とダンスは生活の一部だ。ことダンスに関しては、ジャズダンス、クラシックバレエ、モダンダンス…と興味は尽きない。

十歳のとき、店に来たブロードウェイのスターたちが踊ってくれた大迫力のラインダンスの感動と「ミュージカルを目指したら」というアドバイスがマーティーさんの原点。「ミュージカルは、歌、踊り、演劇の三つの要素が一つになって、三倍の感動を生む。演じる側も、オールマイティーが求められる難しさがあるから、充実感が大きいのもかもしれない」とその魅力を語る。

今春、大阪芸術大学舞台芸術学部ミュージカル学科を卒業、六月から東京のタレント事務所にも所属、舞台を中心に活動する。「ミュージカルで培った経験をいかし、今後はタレントとしても幅広く活動したい」

あの日与えられた夢、今度は「一人に夢を与える人間になりたい」

〈宇都宮〉



←↑春、生まれ変わった岡本
“石量の街”として生まれ変わった岡本で、4月11日
「春・岡本・誕生祭」としてさまざまな催しが行なわれた。
自然石の石量の商店街を人力車が巡り、ストリートパフ
ォーマーがちびっこ達の人気をあつめた



↑多文化「美」の交流
4月2・3日の神戸YMCAクロスカルチュラルセンター創立20周
年記念「国際寺子屋展」では、民族コスチュームファッションシ
ョーや民族音楽コンサートが行われ、多文化の美の交流が華やか
に催された



→WHO神戸センターで
国際シンポジウム開催
4月7日、WHO神戸センターで、国際高齢者
年である世界保健デーを記念して「生涯現役・
健やかな老い」をテーマに国際シンポジウムが
開催された。医学関係者らを含めた当日参加者
380名は、年齢層も広く、高齢化社会への関
心の高まりを改めてみせた

K O B E コウベスナップ S N A P



←“丘の上のビアレストラン”がオープン
ブルワリーツアーとビール教室で親しまれている「キ
リンビール工場」(神戸市北区)。4月21日には、待望
の“丘の上のビアレストラン”がオープン。「自然の
恵みを仲間であち合うクラブレストラン」をコンセ
プトに、新鮮な神戸ビールや無国籍料理を楽しめる。
写真はオープニングを記念して乾杯する池田義一神戸
支社長(左)と一政武土工場長



↑モロさんご苦労さんでした
UCCコーヒー博物館初代館長の諸岡博熊さんの、
喜寿と“卒業式”が4月26日にUCC珈琲本社9階で
開かれた(P.73)に関連記事



↑松本薫平(テナー)&木下千佐子(ソプラノ)
すてきな音楽夫婦の誕生に幸あれ!
今をときめく関西二期会のテノール松本薫平さんと、
メゾソプラノの木下千佐子さんが4月18日、生田神
社でゴールイン! 神戸ポートピアホテル南館で祝
宴が…。おめでとう!



↓韓国の女性経営者との交流会が…
4月11日の夜。韓国から来神した高位・女性経営者倶楽部のメ
ンバーと神戸商工会議所女性経営者倶楽部が、日韓交流をホ
テルゴルフで開催。美しいチョゴリと唄声は旺盛!



↑おしゃれに
「いくたロード」開き
4月24日の11時、「いくたロード」が震災から美しく立ち上がった。金丸建築設計事務所の設計で、川崎重工業が施工。時計台とランタン、そして石畳が、道ゆく人々に春を呼びこんだ（写真は通り初め風景）

↑みこしワッショイ
生田神社春祭り
神戸の春祭りのさがけ「生田祭」が4月15・16日に営まれた。16日の発典祭では、諏訪山地区の威勢のいい青年たちが、神戸市内を元気に歩き景気回復などを祈願した

↑さくら満開 一宮さん春祭り
一宮神社の春祭りが、4月11日の午前11時から、満開の桜の花のもと本殿で式典が開かれた。山森大雄美宮司は「震災から丸4年目の春を、氏子の方々と復興への確かな足どりを共にできて嬉しい限りです」と



↑インフィオラータこうべ'99元町あなもん
今年も市内各地で催されたインフィオラータ。元町穴門商店街では4月24・25日、神戸中華同文学校、聖ミカエル国際学校・マリスト国際学校の生徒達が中心になり、居留地返還100周年を記念した花絵を製作。富山県砺波市からの約8万本のチューリップがストリートを彩った

K O B E コウベスナップ S N A P



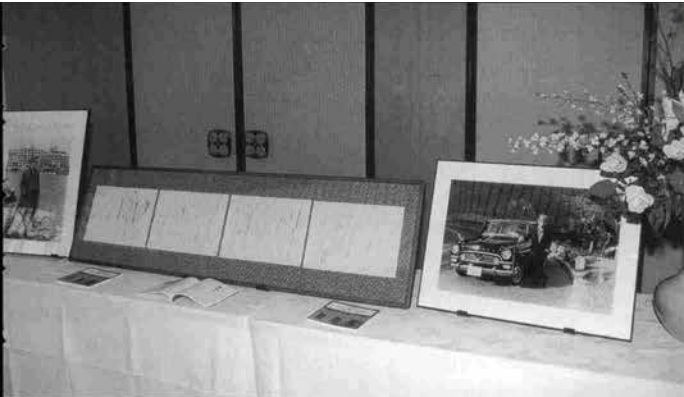
↓ハードロックカフェ100号店オープン
大音量のロックが流れる店内で、ボリュームたっぷりのアメリカンな食事を…。世界に知られるハードロックカフェの神戸店が、4月27日神戸ハーバーカスにオープンした。
上写真は、25日に行なわれたサックスパーティー。右からWD1グループ社長の住谷栄之資氏、パソナグループ代表の南部靖之氏、ハードロックインターナショナルアジア地区スーパーバイザーのJ・オーラップ氏



←らんぶの殿堂、旧居留地にオープン
4月28日、旧居留地のクリエイティブ神戸に「神戸らんぶミュージアム」がオープンした。関西電力が旧「北野らんぶ博物館」の赤木コレクションを引き継ぎ拡充した灯火約2400点が展示されている。写真は27日のオープニングレセプション



ジャパンフローラ2000のマスコット
「ユメハッチ」も登場!



故・司馬遼太郎さんの生原稿「世界にただひとつの神戸」が感動を誘った



貝原俊民兵庫県知事



貝原知事もユメハッチらと乾杯!



司馬作品を朗読した劇団四期会の仲比呂志さん



イラストレーターの永田萌さんの



祝砲(!)を準備する前衛アーティスト・榎忠さん



小誌主筆・小泉美喜子を囲んで



司会はおなじみ
村上和子さん

「神戸っ子祭り'99」華やかに!

月刊神戸っ子創刊38周年
司馬遼太郎「ここに神戸がある」出版記念パーティー
小誌創刊38周年と司馬遼太郎「ここに神戸がある」の出版を記念して「神戸っ子祭り'99」が4月15日、ホテルオークラ神戸で開かれた。文化賞「ブルーメール賞」「神戸っ子賞」の授賞式も兼ねたパーティーは、豪華ゲストを迎えて華やかに幕を開いた。

至福の愛と笑顔 今岡寛和〈神戸ルミナリエ・作品プロデューサー〉

「今夜は、カラ元気で精一杯いきましょー」。宴は、こんな小泉主筆の掛け声ではじまった。今日の経済不況をあらためて実感する。

ところが、ご来場の皆さまは大いに元氣だ。特に女性、それも中高年のいわゆるマダムとでもお呼びすべき人々がとても元氣だ。バリバリの女性実業家かと思えば、家庭をもつ普通の主婦(ただし、自己研鑽には余念がないようにお見受けする)たちが、神戸を代表する文化人、財界人と生き生きと対話している。

デザイナーの藤本ハルミ先生がこんな話をしてくださった。「神戸は、社交のプロではない普通のご婦人たちが自信をもって社交界を楽しめる」。お隣の大阪では、このようにはいかならないらしい。そこが神戸なのだそう。

宴が催された四月十五日は、芽吹く緑や花々が新生や再生を象徴する季節だ。春といえば、私が好きなルネサンス絵画「ラ・ブリマベール」(イタリア語で春の意味で、メディチ家の子息が結婚の讃歌を描かせたものだ)は、春をモチーフに至福の愛を表現している。「神戸っ子祭り」も至福の笑顔がいっぱいあった。人々の出会いと対話の中に、本当に何かが生まれるのではないかと感じてしまう。

昨今、共通の喜びや楽しみを味あえる祭りを新しく生むことは、特に成熟した都市社会の中では難しい。言い換えれば、参加者が、一体になれるものが少ない。「祭り」の誕生と成熟の過程が、古く君主制の時代から民主社会への変遷と同じくして単純では無くなっている。

「神戸っ子祭り」は、そんな今日において、とても不思議な存在なのかもしれない、と感じつつ、何かを生み出せるかもしれないそのエネルギーを吸収できるよう、また来年の「春」も参加させていただきたいと思う。



バイオリニスト北浦洋子さん（ブルーメール賞・音楽）



狂言の善竹隆司さん（右）と隆平さん（ブルーメール賞・舞台芸術）



コープこうべの高村勲さん（第9回神戸っ子賞）



エッセイスト毛丹青さん（ブルーメール賞・文学）



ルミナリエの今岡寛和さん（ブルーメール賞・ファッション）



造型作家の上前智祐さん（ブルーメール賞・美術）



乾杯の音頭は大阪丸ビル社長の吉本晴彦さん



善竹兄弟によるお祝いの狂言



ヴィッセル神戸の和田昌裕さんも応援に

継続を支える力

三好栄三（神戸ファッション美術館 学芸部長）

「神戸っ子」は「えらい」。いきなり僕らしくない「ほめ言葉」から出発することにする。でも、本当に「えらい」。なにが「えらい」といって、それは「継続」である。三十八年間（嘘の三八）とも言いが、もつづいているのは本当に「えらい」。

この「継続」は、この雑誌が深く神戸に根を張り、多くの人々に支えられてきたからに他ならないからだ。でも、この「継続」を支えてきたものはそれだけだろうか。「継続」は、ただ決まったスタイルやシステムを守っていく力によってではなく、常に創造する力、新たなものを生み出す革命的な力によって支えられているものだ。

今回の「神戸っ子祭り」はこの街を支え、「神戸っ子」を応援してきた人達の震災を乗り越えてきた喜びに満ち溢れていた。「ブルーメール賞」は、長くこの街を支えてきた人達と革新的な力に満ちた若い人達がバランス良く受賞していた。ここにも「継続」を支える力がハッキリとあらわれていた。

しかし、神戸という街は「魅力ある街」として、「ファッション都市・KOBÉ」として「継続」してゆくのだろうか。いま、この街を新たな震災が襲っている。ふところ（経済とこころ（精神）の震災である。経済的な危機と震災からの復興（あるいはそう思っていること）が弛緩と無気力を生み出しているように思えてならない。この「新たな震災」から立ち上がるためには前の震災復興以上の「怒り」現状に対すると「力」（新たなものを生み出す）が必要ではないか。弛緩と無気力に対する「怒り」を「力」と「スピード」に変えなければならぬ。そして、それらを神戸という「魅力ある街」を「継続」し「創造」する「力」に変えなければならぬ。

だから、僕はこの街で「怒り」を拾い集める。

「神戸っ子祭り'99」
ニユー・ジツクタイム!



羅清水さん



上平田裕子さん



滝えり子さん



松本幸三さん



村上美穂さん



堀郁子さん



湯井一葉さん



会場には、さまざまな“輪”が広がった



送られてきた一本の50YEARSボールペン メンズハウスグループ代表取締役 中村妙子さん

我が社は、今年創業50周年になるらしい？ 記念品屋さんから送られてきた見本のペンにそう書かれていました。戦前、新開地が賑わっていたころ、レコード屋を営んでいましたが、終戦後三宮に進出して糸偏の商売に変身し、グンゼ肌着の卸しとシャツ・セーターの小売を商いするようになりました。

現在の商品形態になったのは70年代後半、自社ブランドのスーツ・シャツを企



「女性でもOKのシャツもありますよ」と中村妙子さん（メンズカタライザー前）

画し販売する事で、レディースメーカーのバイヤーの方たちが着るスーツとして、玄人受けする商品を買っていました。そしてシャツに至っては大ヒット商品が生れたのです！「セカンドシャツ」別名「ドクターシャツ」。斜めファスナーで生地は普通のドレスシャツと同じ、2,980円という値頃感も手伝って、爆発的な人気でした。80年代に入りスーツ・シャツ・セーターとも派手派手でカラフルになりましたが、バブル崩壊と共に地味でシックに戻ってきました。

ヒットが出にくくなった90年代も今年で終わり、2000年に向かって、たった



スーツからカジュアルまでシンプルでおしゃれな商品がズラリ

1本の50YEARSボールペンがポストに入っていた事で歴史の重みを少しだけ感じ、21世紀の扉を開きたいと思います。

KFSも今年25周年記念行事を7月に行います。多数ご参加ください。

■メンズカタライザー

神戸市中央区三宮町1-8-1-116（さんプラザ北側）
TEL.078-331-3915
（姉妹店 メンズインテグラルはセンタープラザB1F）

●KFS25周年記念講演と記念パーティのお知らせ●

ルミナリエに500万人の観客を呼んだプロデューサー今岡寛和さんの記念講演会です
・7月10日（土）午後6時～講演会（無料）
神戸商工会議所にて
・同日午後7時～記念パーティ（6000円）
ホテルゴールにて

お申し込み KFS事務局（月刊神戸っ子内）
☎ 078-331-2246（小泉・前田）



SAMOTO CLINIC



ママといっしょに



あかちゃん：中川 悠 くん
（平成10年12月7日生まれ）

パ パ：伸二 さん

マ マ：由加子 さん

「悠々と伸び伸び育ちますように…」

★佐本産科・婦人科★

佐本 学

神戸市兵庫区中道通4-1-15
TEL:078-575-1024（病室TEL:078-577-7034）

市バス上沢4 停南スグ

●駐車場完備●

味な街

連載 12

シャガール

料理司が客と対し得るのは料理を通してである。料理司が料理と一体になり、客に対するさまは、利休の「この年、この月、この日、客を迎えてする菜は生涯中この一回の他にあらす」という一期一会の心に他ならない。そんな人や店を紹介したい。

洋食といえばフランス料理をイメージするのが常だが、我々熟年世代は「ソースがコッテリすぎて、どうも」と敬遠する向きが強い。私も近頃は淡泊な味を追っていたが「シャガール」の味に出会って、ソースのスムーズな触感と口に広がる爽やかな滋味に感嘆し認識を新たにしたい。

私の洋食と始めは、七才の時、神戸の伯父の家の朝食に出たトーストとコーヒ。古い京都の家に育ち朝は漬物で茶漬というのが日常習慣であった私にとって、これは大変なカルチャーショックであった。

京料理とフランス料理は相容れないものと思われがちだが、一つの相似点は、昔からパリも京都も海に近く、魚の新鮮な味を客に供するために蘊蓄が傾けられたことである。若狭の海で一塩された鯖やぐじが買子に背負われて京に着く頃に、いい塩梅になる工夫。またパリではノルマンディーやリヨンから遠路運搬される魚をソースで引き立てる技が開発された。

正直な話、魚は大陸に囲まれた湖のような地中

海の魚より暖流寒流にもまれた日本近海の魚の方が身が締まっているし、牛肉なら神戸は比類なき名産地。神戸はグルマンのメッカたる資格十分の町である。「シャガール」オーナーの塩原一正氏は「恵まれた食材をそのまま食べるのでは食文化は育たない」というコンセプトに基づき、料理人の技術でプラスアルファの付加価値を加えるのは当然ながら、コースの一品ごとに適したワインを供して料理の味を更にリファインすることを発案した。夕食に各種何本ものワインを注文することはないが、「シャガール」では五種類のワインを各皿ごとに賞味できるのが楽しい。晩春の一夜、親友米村公作氏とのディナーは、一九九六年のスペインのヴァン・ムスーで乾杯、前菜は志摩から入荷した白えびと小鰻のフライ。ぶどうの種油でクリスピーに揚げた白えびは絶妙。甘口のトカイの白ワインが合う。次はフォアグラと地鶏胸肉のテリーヌ。メインは骨付仔羊ロースト。ミディアムレアの肉にしみるトマトとオリブ油のソースは抵抗感がない。先年ニューヨークの「ル・シ



新鮮かつ珍しい食材がふんだんに使用され、「シャガール」独自の味が生み出される

ルク」で試したラック・オブ・ラムに優るとも劣らず。あの時は隣席にダスティン・ホフマンを見かけたが、今宵は洗いルックスの瓜生シエフが「生クリームとバター地のソースは日本人は苦手なので」と説明してくれる。合わせるワインは八



瓜生シェフ（左）がていねいに料理を説明してくれる。右が筆者



ソムリエの河合氏。それぞれのお料理に合わせたワインが楽しめるのはシャガールならでは



アーティチョーク（チョウセンアザミ）とロケットのサラダ 幾何学的なパート添え（左）は緑のグラデーションが美しい。豚肉とアサリのロースト 地中海風（右）はちょっと珍しい取り合わせ。コッテリしすぎず、素材の味を重視している

RESTAURANT CHAGALL

神戸市中央区日暮通3-5-20
TEL.078-261-0810
日曜・祝日・月曜定休

●ランチ●

前菜・主菜 1000円・2000円

●ディナー●

コースのみ 8000円・10000円
10000円のコースは、前菜・魚料理・肉料理・フランス産チーズ・デザート・パン・お飲み物

●グラスワイン5種●

3500円・6000円

ランチ、ディナーとも要予約



一年のスペインの赤。チーズにポートワインをすすめるソムリエの河合氏はワインの案内のみならず客をくつろがすエンタテイナーでもある。

シーザーがフランスを征服した頃、ローマ人は肉を手づかみで食べていた。その後イタリアのメディチ家の二人の姫がフランス国王に嫁ぐ際、随行したコックが伝えたのがフランス料理の黎明といわれる。西暦一五〇〇年半ばである。日本で南蛮貿易の繁昌と共に「紅毛のターフル（卓子）料理」が普及し始めたのも一六〇〇年代。爾来四百年、人間の味へのあくなき挑戦は続けられた。

「国外から受け入れたレディメイドの受け売りはダメ。高級オーダーメイドは高価だから中間のイージーオーダーで食文化を育てたい」と塩原氏は言う。西洋の模倣でなく神戸の風土にブレンドした独自の味が着実に確立されつつある。

壁にイスラエル聖堂のステンドグラスの下絵が五枚。シャガールの抒情的幻想の世界にゆったりと時間が流れる。食後酒のカルバドスの香の余韻を残して、神戸のハイカラ文化を堪能した宴は終わった。

神戸あの人この人

神戸ステーキ『彌(わたる)』の味は別格・聞き手／福元早夫

神戸・三宮の中心地にある「ステーキ彌(わたる)」。

あるじは長年、鉄板焼ステーキをクリエイトしてきたオーナーシェフの塚本弥一郎さん。

もとより顔の広い人。書家でもあり、以前の店の時代から各界の著名人に知己が多い。その中でも女優の淡島千景さんとは長い付き合い。

作家の福元早夫さんが、淡島さんと塚本さんに話を聞いた。



いつも華やかな淡島千景さん(写真提供・劇場飛天)

あの人

女優・淡島千景さん

「いつもさわやかで、お元気ですね。若さと健康を保つために、心がけておられることがありますか。」

「宝塚時代からそうでしたが、なんでもおいしいと思って食べますね。それに人生に目的をもつことです。健康でないと、いい仕事ができせんからね」

「女優生活を長く続けておられますが、何年になられますか。」

「五十年を越えました。映画の世界に入ったのが、昭和二十五年でした」

「女優になられた動機といいますが、きっかけはどんなことだったのでしょうか。」

「宝塚音楽学校へ行けば、おけいこ事が習えると思ったのです。昔は現在のように女性が学問や技術を身につけるところがありませんでしたからね。今は、高校や大学に誰でも行けますし、他に専門的な学校もありますよね。あの頃はそれがありませんでしたから、勉強をしに行っただけですよ」

「長く女優をやってこられたその秘訣は、なんだったんでしょうか。」

「あの頃は社会の状況が戦争でした。劇場も閉鎖され、空襲で大変な時代でしたが、宝塚をやめませんでした。終戦になって自由な時代がやってきて、憧れていたヨーロッパやアメリカの衣装が着られるようになったんです。そうすると、芝居が面白くなってきたのです」

「関西について思うこと、感じることは、どんなことでしょうか。」

「十四歳から十六歳までの青春時代に、宝塚音楽学校で寄宿舎生活を過ごしましたから、第二の故郷です。関西

で大人として育ちました。それに父親が滋賀県の出身ですから、親近感を覚えます」

—神戸についてはどんな思いがありますか。

「まずハイカラ。大阪は日本人独特の情緒があったいいですし、神戸は外国的な風情があって、ハイカラなんです。宝塚にいたころ、三宮や元町の高架下で食事をしたり、買い物をしたり、異人館通りを歩いたりしたものです」

—若い人たちがファンの方へ、お言葉をください。

「いい時代にうまれて幸せですよ。でも、浮かれてばかりいないで、自分をもっと見つめてほしい。感謝の気



垂涎のステーキに舌づつみをうつ、前列中央が淡島さんと右が熊谷真美さん。左が塚本社長

持ちを持って生きてほしい。自己を持つこと、特徴を持つことです」

—これからの目標や、夢、希望といったことを聞かせてください。

「人生は後戻りができません。ですから、生きることを大事にしていきたいですね。それには、自分で自分をつかり管理していかなくてはなりません。その上で、努力していい仕事をしていきたいですね」

—ありがとうございます。ご活躍を期待いたしております。

この人

神戸ステーキ「彌（わたる）」

オーナーシェフ・塚本弥一郎さん

—女優の淡島千景さんが、『彌（わたる）』のステーキのおいしさは格別だとおっしゃっていました。

「人格、識見、仕事、容姿とすべてに秀でた先生に、格別だと言っていたら光栄です。過日も熊谷真美様と高殿ゆかり様をお連れいただき、『美味しいステーキで私の鼻も高くなりました』とお手紙までいただきました。先生とは十五年くらいになりますが、テレビの番組に一緒にさせていただいたり、私の書作展で花をいただいたり、先生の楽屋へお邪魔したりとお世話になってばかりいます」

—店内のインテリアも凝っていますね。

「天井高六メートルの壁面に、書と日本画の大作を飾り、七メートルの鉄板の他に扇型の鉄板の個室はすべて和室になっています。座席が掘り炬燵式になっていますから、存分にくつろいでいただけます」

—この道を歩いてこられて、何年になりますか。

「鉄板焼ステーキの会社経営をたのまれ、和牛を追求するようになってからは、そろそろ二十年ですが、それ以前、学生時代にアルバイト先で調理師の免許をとり、大学を卒業して外食産業に入社し、本部の地区長、商品企画、厨房開発などの所属長を歴任してきました」

—この道を進むのだ、と決意されたことはなんだったのでしょうか。

「三度ありました。はじめは大学を卒業して教師になろうか、それとも大学院へ行きながらクラブの監督をして、アクションのできる俳優になろうかと考えていましたが、結局これから上場する外食産業に就職したこと。次は姉夫婦から、倒産の危機にある「みその」を立て直して『自分たちを助けてほしい』と頼まれ、命がけでやったこと。三度目は阪神大震災後の三宮で神戸ビーフの名に恥じないステーキ店をつくらねば、と決意したことです」

—「苦労がいろいろあったと思うのですが。」

「ええ、それらの苦労を、これから活かしていかなければならない、と思っています」

—仕事の上で、一番の喜びはどんなことでしょうか。

「良き友に巡り会えたことです。人は真暗闇になった時、明るい時は気づかなかつた星の輝きに感動するものです。一昨年それを経験しました。我が人生の財産です」

—これからの目標を聞かせてください。

「世のため人のため、食文化の発展のために力を尽くしていきます。『だれ習うことなく鉄板焼ステーキをクリエイトしてきて、業者や社員をわが子のように可愛がり、ときには私財を投げ出して教育してきた』と身にあまる言葉をくださって、長くご支援をたまわっている方々のご恩にきつと報いる様、さらに勉強して生長し、店を発展させていきます。よろしくおねがいします」

竹久夢二

「四つの恋のものがたり」

〈その一〉 宵待草秘話

中右 瑛

までと暮らせど 来ぬ人を

宵待草の やるせなさ

.....

今宵も月は 出ぬさうな

恋に泣くやるせなさ。退廃ムードを多分に秘め、庶民の心を揺さぶるこの「宵待草」の歌は、竹久夢二の作詩、多忠亮作曲、柴田秀子歌唱、大正七年ごろより巷間で愛唱されはじめ、大正という暗い時代のムードに相乗して、たちまちのうちに全国に流行していった。

夢二は、下町の哀感を滲ませ、人と人とのふれあいや別離など、人生のせつなさ、はかなさを漂わせ、あの憂いをふくんだ大きな瞳の愛らしい美人画で、一世を風靡した。

夢二は大正ロマンを代表する叙情詩人であり、多才な芸術家である。また、多くの女性遍歴をしたことでも知られている。

この「宵待草」の詩には、その夢二の「小さな恋のものがたり」が秘められているのである。

それは明治四十三年八月、二十七歳（数え）の夢二は、前年に協

議離婚したはずの他万喜と、千葉県銚子の海鹿島に避暑旅行に出かけた。

夢二らが泊った民宿「宮下」の隣家には、美しい姉妹のいる長谷川一家が住んでいた。

妹のタカは文学少女。二十一歳。夢二のみの聡明な美人だった。タカは秋田高女を卒業後、海鹿島の実家に戻っていたのだった。

夢二はタカのことを、仮初めに「お島さん」と名付けた。夢二は他万喜には

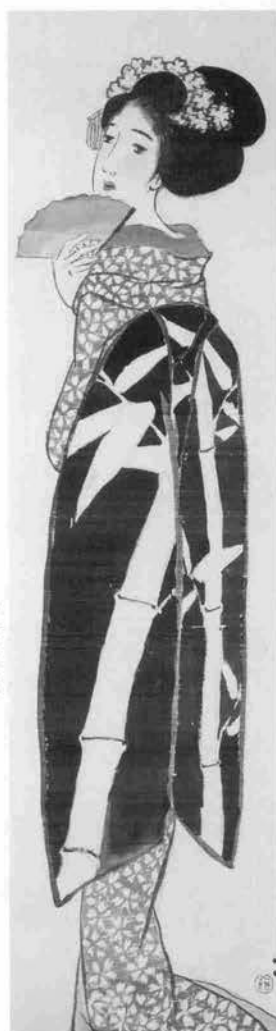
「スケッチに行く」

といって、「お島さん」宅へ足しげく通った。

遥かに大吠埼の灯台が望まれる海鹿島海岸の磯辺いっばいに生茂る待宵草は、二人を祝福するかの如く咲き乱れていた。二人は幾度かの逢瀬を楽しんだのだ。

二人にとって夏はまたたく間に過ぎてゆく。夏の終わりは二人の別離のときでもある。来夏の逢瀬を約束して……

翌年、夢二は再びこの地を訪れたが、憧れの「お島さん」は既に



夢二筆「舞扇」
夢川師宣の名作「見返り美人」を舞妓に置きかえている。黒いタラリの帯の竹の図柄が印象的である。数多い夢二の「見返り舞妓図」のなかで最も初期の作品である。

この地を去っていた。二人の仲を察知した「お島さん」の父が、「お島さん」を他家へ嫁がせてしまった、ということであった。

ブラトニック・ラブとも思えるこの恋は、はかなく崩れ去ってしまった。夢二は、月のない夜の海鹿島海岸の岩影で、独り寂しく来ぬ人の思いにふけていたのである。

この失恋のやるせない心境を、後日、夢二は詩に託したのだった。

「お島さん」との別離の翌年の明治四十五年六月、雑誌『少女』に

「宵待草」と題された次のような夢二の詩が発表された。

「宵待草」

遺る瀬ない

釣鐘草の夕の歌が

あれあれ風にふかれて来る

までどくらせど来ぬ人を

宵待草の心もとなき

「おもふまいとは思へども」

われとしもなきため涙

今宵は月も出ぬさうな

さみせんぐさ

宵待草

竹久夢二詩

多忠亮曲



NO. 106



セノオ楽譜「宵待草」夢二装画

これが「宵待草」の原詩で、のち、お馴染みの三行詩となった。署名「さみせんぐさ」は夢二の別名。

宵待草に擬せられた夢二のせつない心情。宵待草は夢二の造語で、正しくは待宵草。月夜に咲く月見草のことである。なんともメルヘンチックな世界。

「お島さん」への追憶の詩である。

■中右 瑛（なかう・えい）
抽象画家。浮世絵エッセイスト

1934年生まれ、神戸市在住

（受賞歴）行動美術展において奨励賞、新人賞、会友賞、行動美術賞受賞。浮世絵蒐集研究の功績により浮世絵内山賞受賞、半どん現代美術賞、兵庫県文化賞（1998年）など受賞。

現在 行動美術協会会員 国際浮世絵学会常任理事。著書に、抽象画集「シェリット・リンドミラクルブルーの世界」「浮世絵ミステリー秘説」「写楽は18才だった」「忠臣蔵浮世絵」がある。

ZOOM IN ZOO

うらやましいホッキョクグマの誕生

【大阪天王寺動物園】

亀井一成の
ズーム イン ズー



天王寺動物園で昨年生まれたホッキョクグマ

すくすく ふわふわ
白クマの赤ちゃん誕生!

大阪市立天王寺動物園(天王寺区)で昨年11月に生まれたホッキョクグマの赤ちゃんがスクスク成長、体長約50センチに達し、3月中旬に一般公開される見通しになったと、各誌が写真で大きく報じました。あまりの可愛さにさそわれたのはボクだけではないでしょう。

人だかりのホッキョクグマ 生後108日目

いよいよ一般公開の日、ヒト・ヒト・ヒト・カメラ・カメラ・カメラ、それはバンダに負けない大歓声でクマ舎前は動けません。

「かわいい!」

「あつ動いた!」

「立ち止まらないで下さい!」

「幼児たちに前を開けてやって下さい」



ミユキとアイスの交尾。赤ちゃんできるかな

ガードマンがつきつきり、その押し合いの中で背のびのボク、
「いいなあ! うらやましいなあ!」
カメラのシャッターを切りまくって
いました。

ホッキョクグマの出産と成長は他のクマに比べ非常に難しく、各動物園が秘策の研究を続けてきたのです。

国内での出産例は過去119例ありますが無事大人に育ったのはわずか15頭、天王寺動物園でこまで育ったのは5年ぶり4頭めの快挙なのです。

両親はユキコ(19才)とネボスケ(22才)。野生ではメスが単身で極寒の雪洞の中で出産して子を育てるのです。そこで、動物園でもユキコと子グマだけで、オスのネボスケとは当分は別居。

午前中は親子、午後はオスをだすというローテーションの公開です。

いたずら好きの子グマは、乳を飲んで眠り、起きてはゴロンゴロン、ユキコとじゃれあう姿に園児たちはくぎづけで動きません。大勢のカメラマン



ホッキョクグマの赤ちゃんを一目見ようと超満員

が一般客の視界をさえぎっていることも、人気のため待つしかありません。

わが王子動物園ミユキ(満8才)の母親が、またこのユキコなのです

「やっぱりミユキに似てる!」

子グマを抱く、母親のユキコと、いまだ大人になった神戸のメス、ミユキとは母子であって、そっくりなのです。

実は天王寺で第3産めに生まれ育ったメスのミユキが、神戸のアイス(8才鉋路生まれのオス)の嫁にきて7年。

「ぼつぼつ」繁殖が期待できる年齢になっているから、よけいにうらやましいのです。

クマは冬に洞穴にこもり越冬するの



おっぱい飲んで大きくなってね



ママとじゃれあう赤ちゃんクマ

毎年11月初旬にメスを暗闇の産室に隔離し、係員も出入禁止

天王寺では今回もまた昨年の11月2日からユキコを隔離、入口をベニヤ板で覆い、真つ暗にして係員も出入を禁止、集音マイクを設け、子の鳴声を待ちに待ったといいます。待望の鳴声をとらえたのは25日、そして出産が分かりました。

生後2ヶ月頃には真つ白な毛が生え、時折り「ギャー」と鳴き声を聞くようになったのです。

ホッキョクグマの子は母親に踏まれて死ぬケースが多く、特に暖かい本州以南での繁殖はさらに至難なのです。

神戸のミユキとアイスの繁殖行動確認

花が咲き散った頃からボクは園内観察が忙しくなるのです。

4月から5月にかけて、あのフラミンゴたちが次々産卵、小さなヒナが入館者の心をなごませてくれるのです。

総工費六億五千万もかけたホッキョクグマ舎に暮らす「アイス」と「ミユキ」どちらも7才、立派な体格と長くなった首と顔立ちにはまさに思春期のホッキョクグマです。

「カメイさん、交尾していますよ!」
報せを受けたのは昨年の7月27日15

時26分、クマの交尾は長いので、どんな様でもお分かりになります。ボクは1ヶ月も前から知っていました。ホッキョクグマの繁殖成功は、エサとか血統とかではありません。冬には密室の産室に必ず隔離して落着かせると言う生活リズムの適応をもたせることが大切なのです。

今年の冬には子グマ誕生ニュースをみなさまにとどけられるよう心から祈っています。

かわいいホッキョクグマの写真を2枚セットで5名にプレゼントします!

(亀井一成さんの直筆サイン入り)

ご希望の方は、ハガキに住所、氏名、このページの感想または亀井さんへのメッセージを書いて、下記までお送り下さい。
(6月30日の消印まで有効)

〒650-0011 神戸市中央区下山手通3-1-18 ツインズトアビル4階
月刊神戸子「ZOO」係

